

2015年6月22日

全国の孫がいる 55～74 歳の男女 1,000 名に聞いた 『祖父母による孫育て支援の実態と意識』

～孫の面倒をみた経験をもつ人の約8割が「娘や息子のためには引き受けるべき」～

第一生命保険株式会社（社長 渡邊 光一郎）のシンクタンク、株式会社第一生命経済研究所（社長 矢島 良司）では、全国の孫がいる 55～74 歳の男女 1,000 人を対象に、孫への経済的支援や孫とのコミュニケーションに関する実態等をたずねるアンケート調査を実施しました。今回のリリースでは祖父母による孫育ての実態とともに、孫育てをめぐる祖父母の意識についての結果をご報告いたします。

本リリースは、ホームページにも掲載しています。

URL：http://group.dai-ichi-life.co.jp/cgi-bin/dlri/ldi/total.cgi?key1=n_year

《調査結果のポイント》

孫の親に頼まれて、孫の面倒をみた経験 (P. 2)

- 孫の母親の依頼で、面倒をみた経験がある人は祖父で59.8%、祖母では73.0%。
- 孫と同居する場合や、30分未満に近居する祖父母では経験者が8割超。

孫の親からの子育ての相談にのった経験 (P. 3)

- 孫の母親からの相談にのった経験がある人は祖父で32.8%、祖母では60.2%。

孫の親が子育てを祖父母に頼ることへの意識 (P. 4)

- 孫の面倒をみた経験をもつ祖父母の8割近くが「子育ては、祖父母を頼らず、親自身で行うべきだ」に賛同。

祖父母が孫の世話を引き受けることへの意識 (P. 5)

- 孫の面倒をみた経験をもつ祖父母の8割前後が「孫の世話は大変だが、娘や息子のためには引き受けるべきだ」に賛同。

孫育てをめぐる意識 (P. 6～7)

- 祖父母の54.3%は「親自身で行うべきだが、引き受けるべき」。
「頼ってよいし、引き受けるべき」として、孫育てを許容する考えの祖父母は17.4%。
- 55-59歳の祖父母では、「頼ってよいし、引き受けるべき」が27.0%。

<お問い合わせ先>

(株)第一生命経済研究所 ライフデザイン研究本部

研究開発室 広報担当（津田・新井）

TEL. 03-5221-4771

FAX. 03-3212-4470

【URL】<http://group.dai-ichi-life.co.jp/dlri/index.html>



《調査の背景》

わが国の60歳以上の男女を対象に内閣府が実施した意識調査によると、老後における子どもや孫との望ましいつき合い方について、「いつも一緒に生活できるのがよい」と考える人は次第に減少し、「ときどき会って食事や会話をするのがよい」と考える人が増えていきます（内閣府「高齢者の生活と意識 第7回国際比較調査」2011年）。以前は前者の関係を支持する人が最も多かったのですが、2000年代に入ってから後は後者の関係を支持する人が上回るようになっていきます。つまり、日本の高齢者が理想とする老後生活は、子どもや孫といつも一緒に生活する「密着型」から、親子双方がそれぞれのプライベートな時間・空間を確保した上で、ときどき会ってともに過ごす時間を楽しむ「交流型」に転換したと考えられます。

60歳以上の男女の意識にこのような大きな変化が生じている一方で、現在子育て中の親にとって祖父母は、依然子育ての重要なサポート資源として機能している実態があります。そこで、当研究所では全国の孫がいる55～74歳の男女1,000名を対象とするアンケート調査を実施し、孫の世話という物理的な支援のほか、孫の親の子育ての相談にのるといった精神的な支援の実態をたずねました。また、孫の親が子育てを祖父母に頼ることや、祖父母が孫の世話を引き受けることについての祖父母自身の考えについてもたずねています。

《調査の概要》

- 調査対象 全国の孫がいる55～74歳の男女1,000名
- 調査方法 インターネット調査(株式会社クロス・マーケティングのモニター)
- サンプル数 1,000名
- 調査時期 2014年11月5日～7日

《回答者の主な属性》

		n	%
性別	男性	500	50.0
	女性	500	50.0
年代	55-59歳	178	17.8
	60-64歳	275	27.5
	65-69歳	274	27.4
	70-74歳	273	27.3
配偶 状況	既婚(配偶者あり)	876	87.6
	離別・死別(配偶者なし)	124	12.4
孫との 同別居	同居	67	6.7
	別居	933	93.3

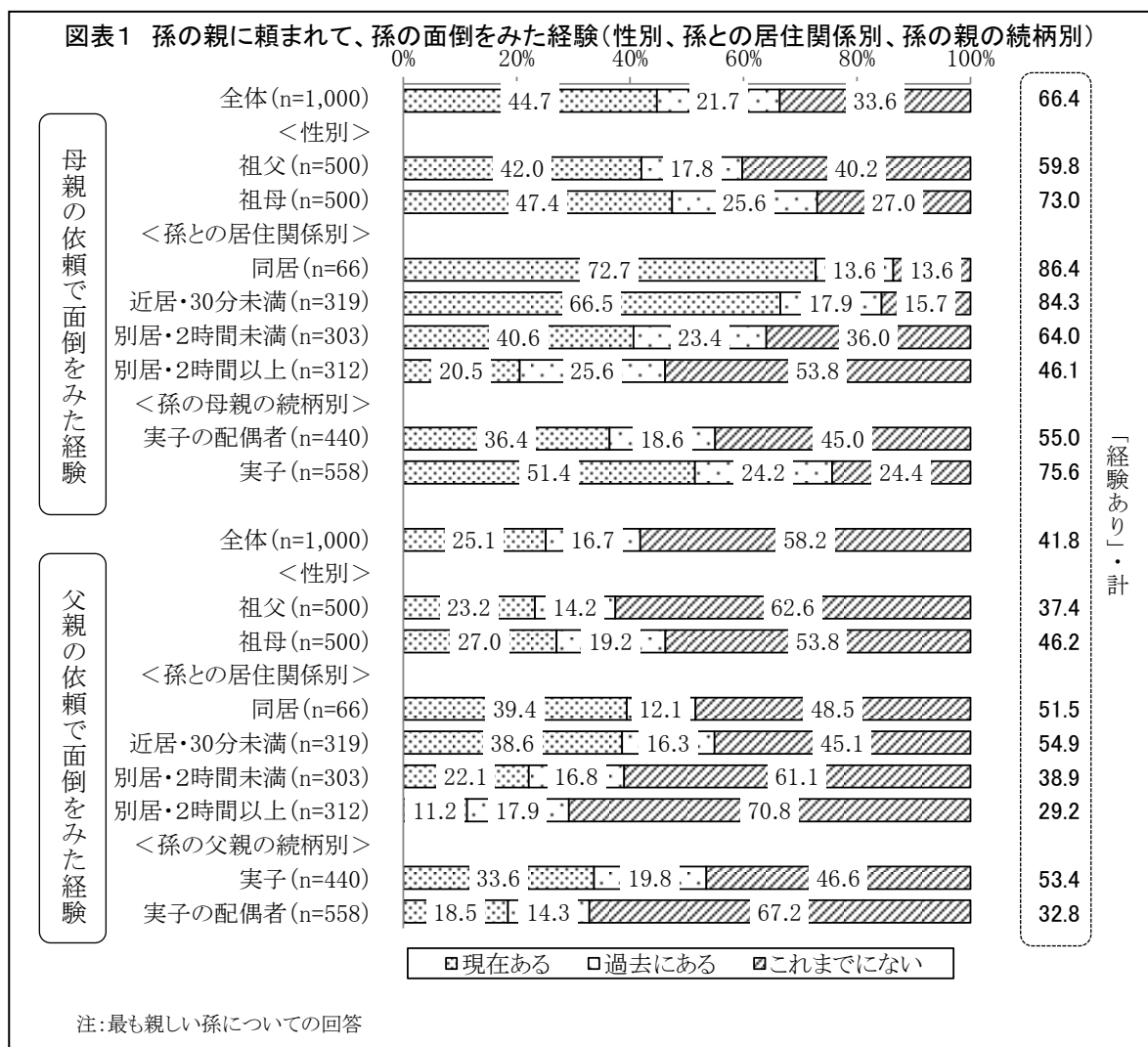
		n	%
孫の人数	1人	329	32.9
	2人	246	24.6
	3人	166	16.6
	4人	147	14.7
	5人以上	112	11.2
最年長の孫 の学齢	就園前	184	18.4
	園児	170	17.0
	小学生	370	37.0
	中高生	196	19.6
	大学生以上	80	8.0

注：学齢が「大学生以上」には、「学校を卒業している」孫を含む

孫の親に頼まれて、孫の面倒をみた経験

孫の母親の依頼で、面倒をみた経験がある人は
祖父で 59.8%、祖母では 73.0%。

孫と同居する場合や、30分未満に近居する祖父母では経験者が8割超。



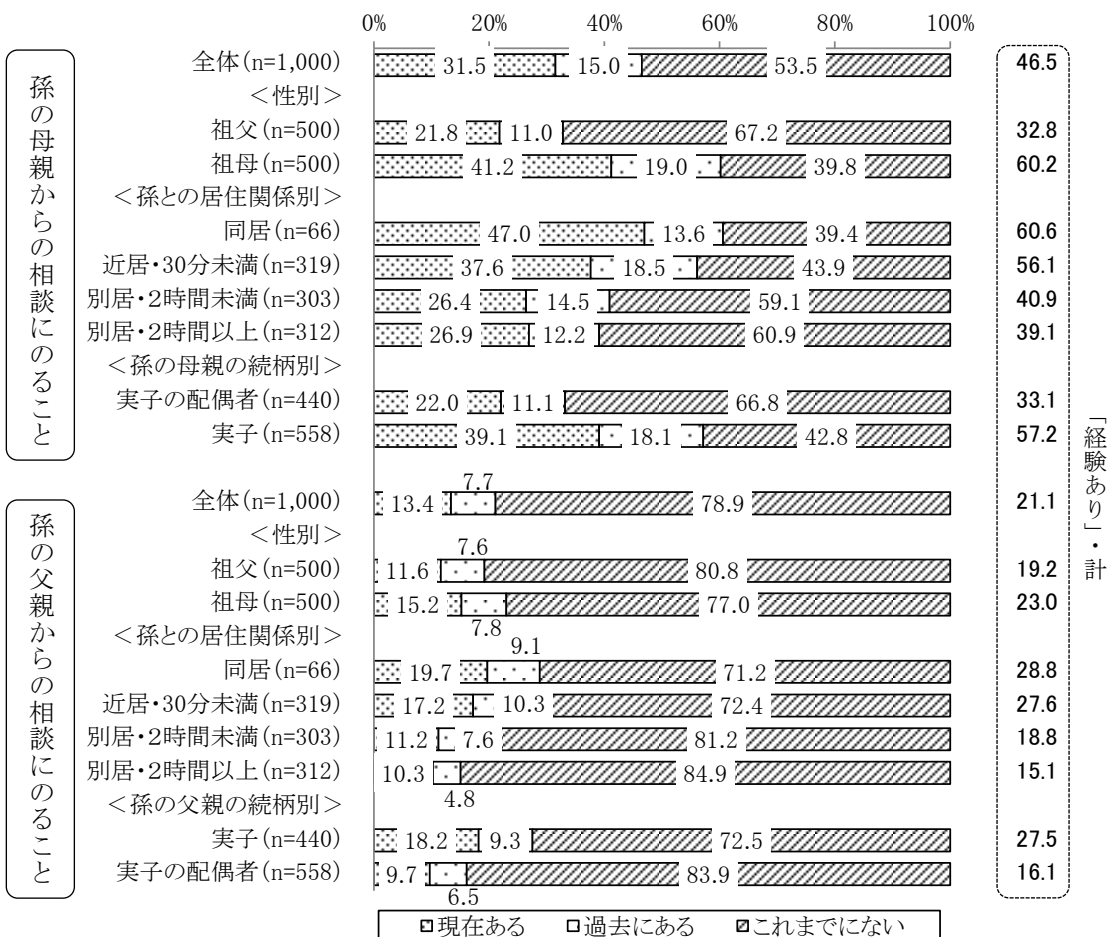
はじめに、孫育ての実態についてみてみましょう。回答者のうち、孫の母親に頼まれて孫の面倒をみた経験がある人(「現在ある」「過去にある」の合計割合、以下同じ)は66.4%となっています(図表1)。居住関係別にみた場合、同居や近居・30分未満の人では8割を超えていますが、別居・2時間未満の人では6割強、別居・2時間以上の人では46.1%にとどまっています。また、孫の親の続柄別にみると、母親が実子の配偶者の人(55.0%)より実子の人(75.6%)の方が、経験がある人の割合は大幅に高くなっています。

これらの傾向は、孫の父親の依頼で面倒をみた経験に関してもおおむね共通しています。ただし、父親の依頼で面倒をみた経験がある人は41.8%であり、母親の依頼に比べて20ポイント以上も低くなっています。

孫の親からの子育ての相談にのった経験

孫の母親からの相談にのった経験がある人は
祖父で 32.8%、祖母では 60.2%。

図表2 孫の親からの子育ての相談にのった経験(性別、孫との居住関係別、孫の親の続柄別)



注:最も親しい孫についての回答

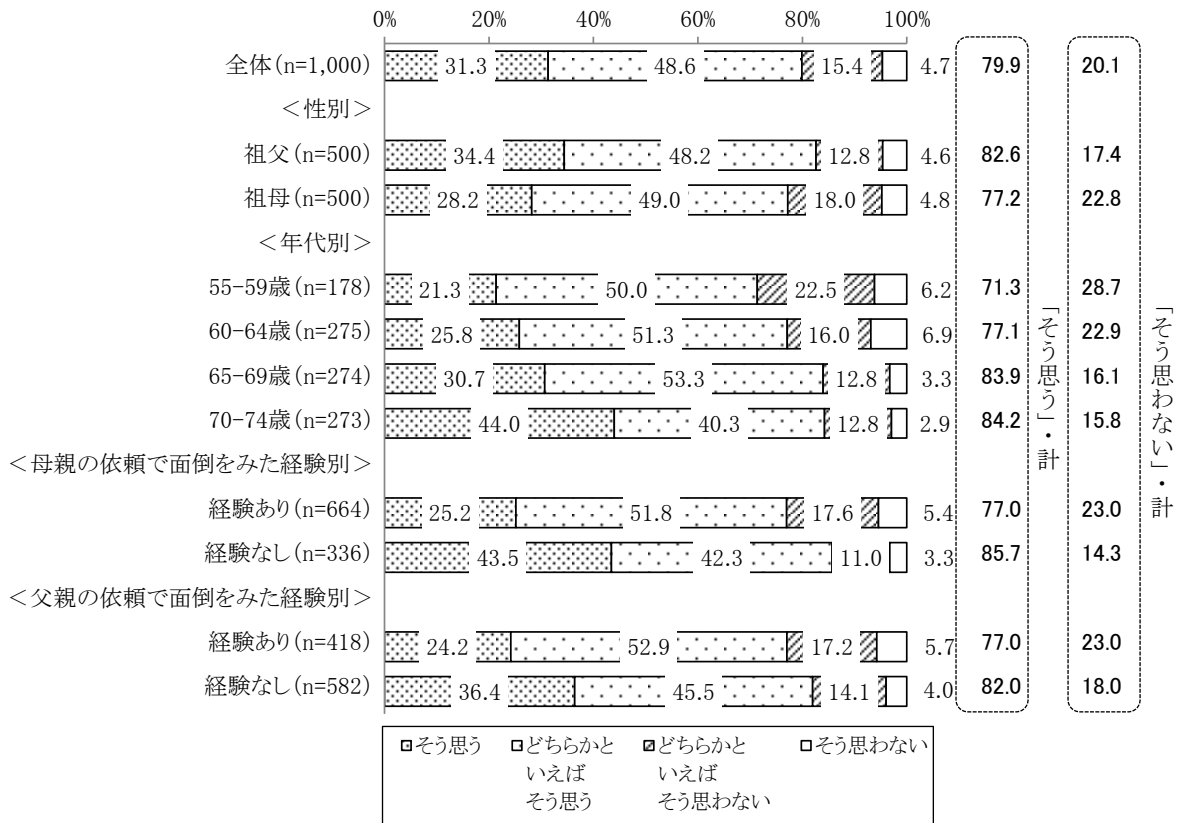
回答者のうち、孫の母親からの子育ての相談にのった経験がある人は祖父で 32.8%、祖母では 60.2%となっています(図表2)。居住関係別にみた場合、同居や近居・30分未満の人では半数を超えています。また、孫の親の続柄別にみると、母親が実子の配偶者の人(33.1%)より実子の人(57.2%)の方が、経験をもつ人の割合が大幅に高くなっています。

これらの傾向は、孫の父親に関してもおおむね共通していますが、孫の父親からの子育ての相談にのった経験がある祖父母は 21.1%と、孫の母親の場合に比べて 20ポイント以上低くなっています。父親の場合、祖父母にとって最も親しい孫であっても、世話の面だけでなく、相談の面でも、祖父母を頼りにすることは母親に比べて少ないことがわかります。

孫の親が子育てを祖父母に頼ることへの意識

孫の面倒をみた経験をもつ祖父母の8割近くが「子育ては、祖父母を頼らず、親自身で行うべきだ」に賛同。

図表3 「子育ては、祖父母を頼らず、親自身で行うべきだ」(性別、年代別、孫の面倒をみた経験別)



次に、親が子育てを祖父母に頼ることや、祖父母が孫の世話を引き受けることについて、回答者がどのような考えをもっているのかをみてみましょう。

図表3は、「子育ては、祖父母を頼らず、親自身で行うべきだ」という考え方についてどう思うかをたずねた結果です。これをみると、そう思うと答えた人（「そう思う」「どちらかといえばそう思う」の合計、以下同じ）は79.9%を占め、祖父母の約8割が子育てを祖父母に頼らず、親自身で行うべきだとの考えをもっていることがわかります。

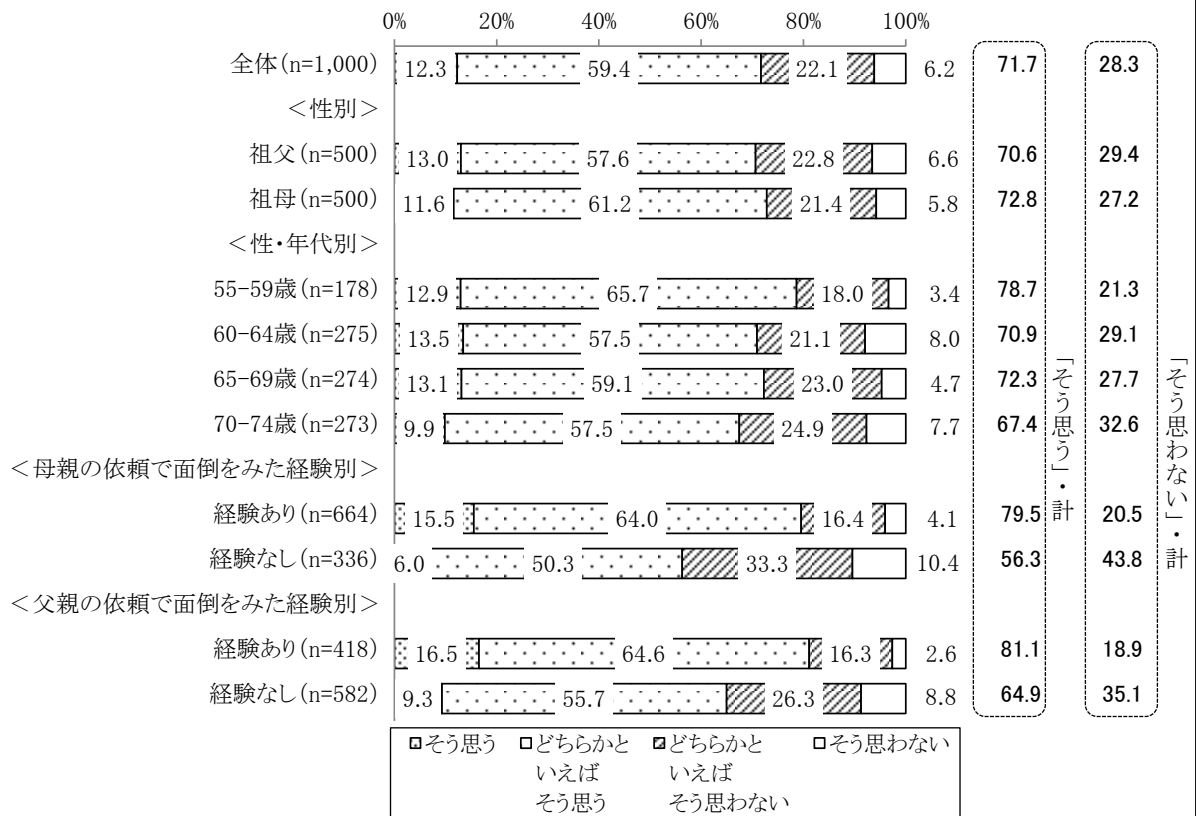
このような意識をもつ人は、祖母（77.2%）より祖父（82.6%）で、若い祖父母より年配の祖父母で多くなっています。また、母親や父親の依頼で孫の面倒をみた経験がある祖父母の8割近くが、本来であれば、祖父母を頼らず、親自身で行うべきだという考えをもっていることも確認されました。

祖父母が孫の世話を引き受けることへの意識

孫の面倒をみた経験をもつ祖父母の8割前後が「孫の世話は大変だが、娘や息子のためには引き受けるべきだ」に賛同。

図表4 「孫の世話は大変だが、娘や息子のためには引き受けるべきだ」

(性別、年代別、孫の面倒をみた経験別)



次に、祖父母が孫の世話を引き受けることについての意識をみてみましょう。

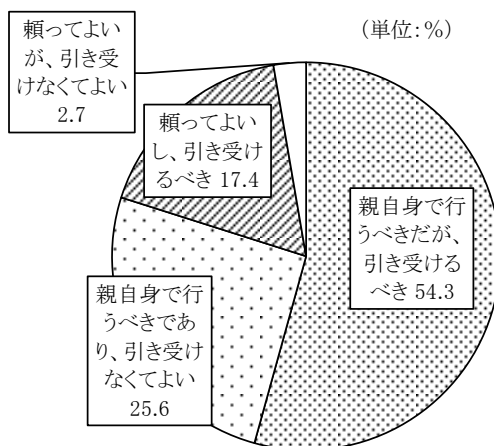
図表4は、「孫の世話は大変だが、娘や息子のためには引き受けるべきだ」という考え方についての回答結果を示しています。これを見ると、そう思うと答えた人は71.7%であり、約7割の祖父母が、孫の世話は大変であっても、引き受けるべきだと考えていることがわかります。

このような意識をもつ人は、年配の祖父母より若い祖父母で多くなっています。また、母親や父親の依頼で孫の面倒をみた経験がある人の8割前後が、引き受けるべきだと考えていることも確認されました。

孫育てをめぐる意識①

祖父母の54.3%は「親自身で行うべきだが、引き受けるべき」。
「頼ってよいし、引き受けるべき」として、孫育てを許容する考えの
祖父母は17.4%。

図表5 孫の親が子育てを祖父母に頼ることと、祖父母が孫の世話を引き受けること
についての考え方(全体)



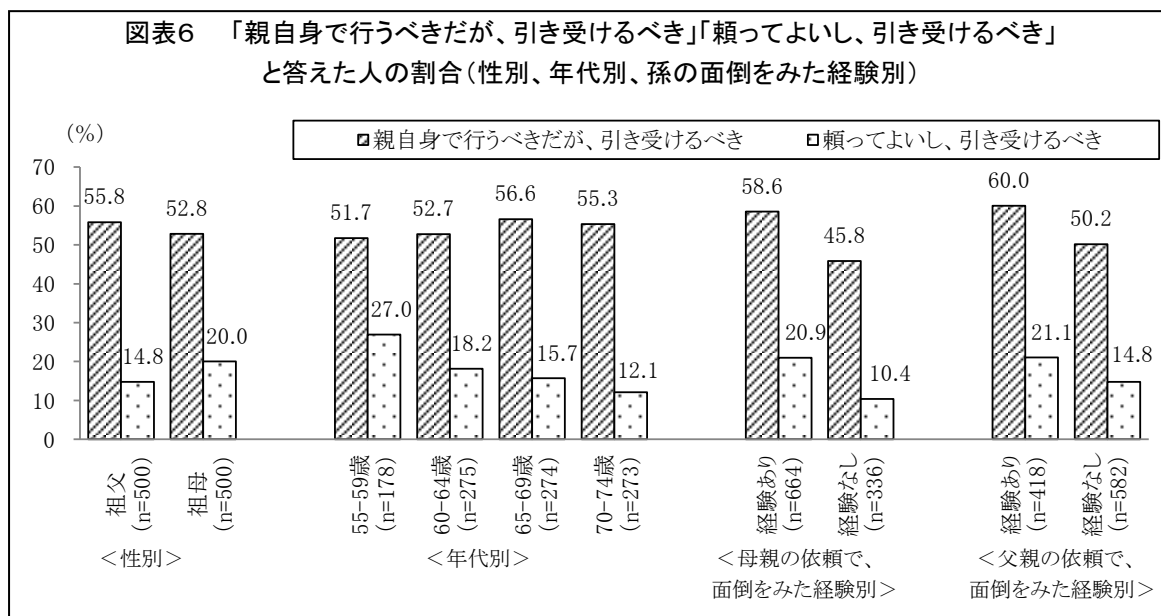
では、祖父母は孫の親が祖父母に子育てを頼ることと、祖父母が孫の世話を引き受けることの双方についてどのような考え方を持っているのでしょうか。

図表5は、先にみた「子育ては、祖父母を頼らず、親自身で行うべきだ」という考えかた、「孫の世話は大変だが、娘や息子のためには引き受けるべきだ」という考えかたへの回答を組み合わせたものです。全体で最も多かったのは、双方の設問にそう思うと答えた「親自身で行うべきだが、引き受けるべき」であり、54.3%を占めました。回答者の半数強は、孫の親が子育てを祖父母に頼ることと、祖父母が孫の世話を引き受けることをめぐって、本来であれば祖父母を頼らず、親自身で行うべきだという考えを抱きながらも、一方では娘や息子のために引き受けるべきだとする複雑な意識を抱いていることがわかります。

これに次いで多かったのは、前者の設問にはそう思う、後者の設問にはそう思わないと答えた「親自身で行うべきであり、引き受けなくてよい」であり、25.6%でした。これらの人々は祖父母を頼ることと祖父母が引き受けることの双方を許容しない立場の考えをもっています。なお、前者の設問にそう思わない、後者の設問にそう思うと答えた「頼ってもよいし、引き受けるべき」という考えの人は17.4%でした。

孫育てをめぐる意識②

55-59歳の祖父母では、「頼ってよいし、引き受けるべき」が27.0%。



ここで、祖父母が孫の世話を引き受ける場合の意識に注目するため、全体で最も多かった「親自身で行うべきだが、引き受けるべき」と、「頼ってよいし、引き受けるべき」と答えた人の割合を主な属性別に比較しました(図表6)。

性別、年代別、孫の面倒をみた経験別のいずれの比較においても、「親自身で行うべきだが、引き受けるべき」と答えた人はおおむね半数を超え、「頼ってよいし、引き受けるべき」と答えた人を大幅に上回っています。実際に、孫の親の依頼で孫の世話を引き受けた経験をもつ祖父母においても、6割前後がこのような複雑な意識をもっていることがわかります。

一方、「頼ってよいし、引き受けるべき」と答えた人は、年配の祖父母より若い祖父母で多く、55-59歳では27.0%を占めています。この割合は「親自身で行うべきだが、引き受けるべき」と答えた人に比べれば20ポイント以上も低くなっています。しかし、若い祖父母のなかには、孫の親が子育てを祖父母に頼ることと、祖父母が孫の子育てを引き受けることの双方を許容する立場の考えをもつ人が一定の割合を占めることが確認できます。

《研究員のコメント》

＜親の子育て支援者としての祖父母＞

調査の結果、祖母の7割以上が孫の母親の依頼で孫の世話をした経験を、約6割が孫の母親の子育ての相談にのった経験をもっていることがわかりました。祖母は孫の世話という物理的な側面だけでなく、子育ての相談相手という精神的な側面でも孫の親の重要な支援者となっています。祖母と孫世帯が距離的に離れて住んでいる場合に比べて、近い範囲に住んでいる場合には、このような傾向が特に顕著にみられました。

今回の調査では子育てをめぐる祖父母以外の支援資源の実態をたずねてはいませんが、親にとっての子育てのしやすさを考える場合、支援の選択肢のなかで祖父母がどのような位置づけにあるのかという視点も重要になります。調査結果からは、祖父母が最も親しくしている孫の場合であっても、父親の依頼で祖父母が孫の世話をしたり、父親の子育ての相談相手となる状況は、母親に比べて少ない様子うかがえました。男性は、進学や就職などの機会に親元を離れる選択をする人が女性に比べて多く、子育ての時期に祖父母の住まいとの距離が遠い人も少なくないと考えられます。また、女性では結婚や出産を経て以降も親との親密な関係を続けることが多いのに比べて、男性ではそうしたコミュニケーションの面でも親との関係が希薄なのかもしれません。このように考えると、父親にとっての子育て支援者を考える場合には、配偶者や祖父母以外の支援者の存在が、母親以上に重要になる場合もあるのではないのでしょうか。

＜祖父母にとっての孫育ての意味＞

祖父母の多くは、孫の世話や親の子育ての相談相手として、依然多様な形で親の子育てを支援しています。しかしながら、冒頭に述べたように、老後における子や孫との望ましいつきあい方をめぐる祖父母世代の価値観は大きく変化しつつあります。今回の調査でも実際に孫の親の依頼で孫の世話を引き受けた経験をもつ祖父母の6割前後が、子育てを頼られることと孫の世話を引き受けることをめぐって「親自身で行うべきだが、引き受けるべき」という、ある種の複雑な意識を抱いていることが明らかになりました。

こうした結果は、実際に孫の親が祖父母に子育てを頼ったり、祖父母が孫の世話を引き受ける場合に、祖父母が前述のような複雑な思いを抱く可能性を示唆しています。祖父母に孫の世話より優先したいと考えている老後のライフデザインがあったり、生活費を増やすために働き続ける必要がある場合には、孫の世話を引き受けることを祖父母が負担に感じるケースもありうるでしょう。

このような中、50代後半の若い祖父母では、孫の親が祖父母に子育てを頼ることと、祖父母が孫の世話を引き受けることの双方を許容する考えをもつ人が年配の祖父母に比べて多い傾向がみられました。日本の高齢者が理想とする老後生活は、子や孫といつも一緒に生活する「密着型」から、親子双方が程よい距離感を保ちながらつきあう「交流型」へと変化しています。年配の祖父母に比べて若い祖父母では、娘や息子の頼みであればときには孫の世話も引き受けて、成長する孫との交流を自分のライフデザインとともに楽しみたいと考える人が増えているのかもしれません。(研究開発室 主任研究員 北村安樹子)